

第4 導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

[水稲・麦・大豆]

1 水稲

県内の土壌は砂壤土から埴土まで分布しているが、良質で安定した生産を行うため、稲わら、麦わらやたい肥等を施用した土壌の改善を図ることが必要である。さらに肥効調節型肥料や地力増強作物のレンゲを組み合わせ、施用効率や施肥低減技術の向上によって良質米生産の維持確保を図ることが必要である。

また、病害虫はいもち病、紋枯病や飛来性害虫のウンカ、コブノメイガの発生が多いが、田植時の箱施肥によって初期の発生は比較的軽微に抑えられている。このため、農薬散布回数は本田で2回程度と少ない状況である。

今後は、耕種的雑草防除技術を励行し除草剤散布回数の低減を行う。病害虫防除については、温湯種子消毒による種子消毒剤の削除や高度な発生予察に基づく本田農薬散布回数の低減を行う。

植物利用（アゾーラ）では抑草や穂肥の減肥を行う。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、稲わらの全量還元を行い、土壌中の腐熟化を促進するため、秋冬期に2回程度の耕起を行う。麦作では水稲収穫後麦播種前に土壌とよく混和する。 ○牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用にあたっては、土壌診断に基づき、適量の散布を行う。 ○麦わら施用田では還元状態とならないよう間断かん水を行う。 ○レンゲのすき込みは、田植前1ヵ月程度とする。 		稲わら600kg/10a たい肥1~2t/10a たい肥(麦+水稲体系)1.5~3.5t/10a 麦わら400kg/10a レンゲ4~5t/10a の場合は基肥無施用
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を全層施肥または側条施肥で施用する。 ○化学肥料を側条施肥で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 		窒素成分削減率 10~25%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	農薬散布削減回数 1回
	○除草用動物利用技術	雑草、害虫	
	○米ヌカ利用技術	雑草	
	○マルチ栽培技術（紙マルチ）	雑草	
	○機械除草技術	雑草	
○温湯種子消毒技術	ばか苗病、いもち病 もみ枯細菌病、心枯線虫病		
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥を施用した場合は窒素分量に応じて基肥を2~4kg/10a削減する。 ○麦+水稲で前作麦にたい肥を施用した場合は、1tの施用に対し窒素肥料1kg/10aを削減する。 ○県南の重粘土地帯では、麦わらの3年以上の連用は避ける。 ○化学肥料をさらに削減する場合は、タネ油粕等の速効性の有機物を組み合わせる。 		

注：導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容の区域は福岡県全域とする。（以下、同じ。）

化学肥料低減技術における窒素成分削減率とは、第5の施肥基準における当該作物の窒素施肥量に対するものであり、化学肥料の窒素成分削減量の目安を示す。（以下、同じ。）

2 麦

県内の土壌は砂壤土から埴土まで分布している。

良質で安定した生産を行うためには、稲わら、麦わらやたい肥等を施用した土壌の改善、気象変動や生育診断に基づいた効率的な施肥法により、高品質麦生産の維持確保を図ることが必要である。

病害虫は赤かび病の発生が多いが、穂揃期、開花期中心とした防除が行われている。農薬散布回数は少ない状況である。

今後は、耕種的雑草防除技術を励行し除草剤散布回数の低減を行う。病害虫防除については、高度な発生予察に基づき農薬散布回数の低減を行う。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、稲わらの全量還元を行い、水稻収穫後麦播種前に土壌とよく混和する。 ○土壌診断に基づき、牛ふんたい肥、バークたい肥等を施用し、水稻収穫後麦播種前に土壌とよく混和する。 		稲わら600kg/10a たい肥 1.5～3.5t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○大豆後作に麦を作付けし、窒素肥料の減肥を行う。 		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	農薬散布削減回数 1回
	○機械除草技術	雑草	
	○温湯種子消毒技術	なまぐさ黒穂病	
その他の留意事項	○機械除草技術は畦立栽培とし、オートカルチ等で3～4回行う。		

3 大豆

県内の土壌は砂壤土から埴土まで分布している。

良質で安定した生産を行うためには、たい肥等を施用した土壌の改善、地力に応じた効率的な施肥法により、高品質大豆生産の維持確保を図ることが必要である。

病害虫はハスモンヨトウやカメムシ類の発生が多く、生育期、開花期中心とした防除が行われている。農薬散布回数は少ない状況である。

今後は、耕種的雑草防除技術を励行し除草剤散布回数の低減を行う。病害虫防除については、高度な発生予察に基づき農薬散布回数の低減を行う。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づき、牛ふんたい肥、バークたい肥等を施用し、播種前に土壌とよく混和する。		1 ～ 2 t/10a
化学肥料低減技術	○有機質肥料を基肥で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術（BT剤）	ハスモンヨトウなど	1回
	○機械除草技術	雑草	1回
その他の留意事項	○機械除草技術は畦立栽培とし、オートカルチ等で3～4回行う。		